

第十三回がん哲学塾

ニュースレター

発行日：平成 30 年 7 月 24 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

E-mail:juku_0307@yahoo.co.jp

平成 30 年 7 月 14 日土曜日に
樋野興夫先生の著書の中の一節「尺取虫になって歩む」を用いて、
恒例の読書会という形で、第 13 回がん哲学塾を開きました♪

「目標」

5 年生 森 夕理子

「人生において達成すべき目標を立てることも大事であるが、その過程が大切である。」
この言葉は樋野先生の本にある「尺取虫になって歩む」という一節の中に出てきます。そこには人生においての進むべき方向を定めることで将来をしっかりと確立させることが学生の本分であると書かれています。私自身、学生として将来のことを考える**学年**になり、気になる一節でありました。以前、「教育というものは一つずつ階段を上っていくことで成長していく。」というお言葉をお聞きし、今回の一節と共通している部分があり、目標に向かって進んでいく際に一つずつ小さな目標という階段を上ることが真の成長であると考えました。
先生方のお話で、教育者としてのゴールはないとおっしゃっていました。世間では出世して役職に就きたいなどの目標をたてて仕事をしている人たちがいます。一見しっかり目標を立てて前に進んでいるように見えますが、時折目標の名目にとらわれて、その真髓を極められていないのではないかと感じる時があります。先生方は自分たちが教育する立場で、お金のために働いているわけではなく、未来を背負う子どもたちのために少しでも力になればいいとおっしゃっていました。人のために尽くすという目標は人それぞれ異なり、具現化されたものではありません。つまり未知の世界であり、その時々が新しいことであるため、自分自身が勉強する身として試行錯誤しながら色々なことに挑戦し、日々成長していく、そのためにゴールはないのだと考えました。私は今まで目標を確立させることが一番大切だと考えていたので、漠然と目標だけ立てて、将来何をしたいのか、自分がどういった人間になりたいか具体的に確立できておらず、目標にゴールのないことというイメージがあまり湧きませんでした。しかしお話を聞いてから、達成すべき目標を明確化するよりも、そこまでに進む方向が重要であり、その道をしっかりと歩むことができるように確立させることが大切であり、遅くなりがちでも試行錯誤しながら着実に進むことで逆境で希望が失いがちな状況でも足元をしっかりと見つめて日々を過ごすことで人生の目標へ進んでいくと感じました。私はこれから国家試験を受け薬剤師の免許を取得し薬剤師として働くという目標がありますが、今回のがん哲学塾を通して、自分が患者さんのためになにをするのか、そのためにどのように行動するかを具体的に考えるきっかけとなりました。

次ページへつづく

「大切にしている事」

5年生 堀部 里帆

今回のがん哲学塾では、学生と先生で、樋野先生の著書から「尺取虫になって歩む」という話を読みました。「達成すべき目標」を設定する事も大事だが、「進むべき方向」を確立させることが学生の本分であると言われていたという話でした。そこから、私達は何を大切にしているのかについて話し合いました。

私は今まで明確に意識したことはありませんでしたが、「他人を思いやる」ことができる人間になりたい、と思っているのかもしれないと思いました。今回のメディカルカフェでお話しした男性の方が「自分はがんにかかっていないし、自分の親戚にもがんになっている人はいない。でも、この年齢になってきてがんにかかっている友達が増えてきた。その内の一人は、その内お見舞いに行こう、と思っていたら亡くなってしまった。友達のお見舞いに行きたいが、何をどう話したらいいのかわからなくてなかなか行けないから、今日は患者さんから話を聞きたい」とおっしゃっていました。友達の為に暑い中、休みの日の時間を割いてわざわざメディカルカフェに足を運び、どう接するのが一番喜ばれるのかを学びに来たその男性の方は、なんでもないことのようにおっしゃっていましたが、それこそが「思いやる」という事なのではないかなと思いました。

私は5月から7月まで薬局で実習をしていましたが、患者さんが処方箋を持たずに薬局に来て、お水を飲んで薬剤師さんと世間話をして帰る、という場面をよく見ました。普段先生が患者さんに接する様子を見てみると、「思いやり」を感じます。「思いやり」があると、人との信頼関係を築くことができることを実感しました。将来働くときも「思いやり」と「人とのつながり」を大切にしたいです。

「がん哲学外来メディカル・カフェに参加して」

5年生 源 麻鈴

今回、初めてがん哲学外来メディカル・カフェに参加させていただきました。がん哲学外来の「医療の隙間を埋める」活動に興味を持ち、癌患者さんが実際にどのような悩みを抱え、感じ、交流されているかを学生のうちに肌で感じたいと思ったことがきっかけです。

私はカフェの中で一緒に話した癌経験者の方の「自分の意思を大切にしてください」という言葉が一番心に残っています。医師にどんなお薬が良いか、何を優先させたいかと尋ねられた時に、体調や環境など何を自分が一番大切にしておきたいかということは事前に考えておかねばならないというお話でした。今はアドヒアランスという「治療や服薬に対して患者が積極的に関わり、その決定に沿った治療を受ける」考え方が推奨されています。しかし、実際に突然目の前に選択肢が現れた時に、戸惑いを感じる患者さんは少なくないと感じました。もちろん、最終的に決断するのは本人ですが、将来薬剤師として相談を受けた時に、患者さんの悩みに寄り添いながら生活スタイルや考え方に合った薬剤を提案させていただけるように精進していきたいです。

次ページへつづく

最後に、病気や家族と向き合おうと必死に努力されている方、病気をきっかけに新たに社会貢献を始めた方、病気と付き合いながら自分のペースを見つけ趣味を楽しんでいる方、どの方の姿も眩しく、強く、とても元気を頂きました。私はただ話を聞いてうなづくことしかできませんでしたが、会の終わりに話を聞いてくれてありがとうと声をかけていただき、とても励みになりました。医療を学ぶ学生として、また人として何ができるのかを見つめ直せた一日でした。

「第13回がん哲学塾」

5年生 田中 葉月

今回は、先輩方がテスト期間中でお休みだったため、沼田先生、横山先生と、5年生3人の計5名の少人数で開催しました。いつも先輩に頼りきりにしていたため、先輩の有り難さを実感した1日となりました。

今回も樋野先生の御著書である「いい覚悟で生きる」の本文の一節を用い、読書会という形で開催しました。今回は「尺取虫になって歩む」という題材を選ばせて頂きました。

そろそろ将来に対しての方向をしっかりと考えないといけないとは、わかっているはずでしたが、どこかでまだ向き合えずにいた私はこの一節に、はっとしました。

話を進めていく中で横山先生が、「達成すべき目標」と「進むべき方向」について教えてくださいました。進むべき方向とは、限りなく続く、自分の中の道しるべになるようなもので、それはなにか今までの経験や体験したことと深く関連しているのではないかと自分なりに解釈しました。

自分の中でこのような進むべき方向はあるかな？と考えてみましたが、まだパツとしておらず、その場でもうまく言葉にすることはできませんでした。

私は今おかれている環境の中で、いろんな意味で偶然が重なり、決して自分だけでは得る事ができなかったらうと感ずることがあります。すべてが嬉しいポジティブなことだけではありませんが、周りの方々のおかげで恵まれている気がします。私はがん哲学塾の場では「恩返しをしたい」と大それたことを言ってしまいましたが、とてもざっくりしていて曖昧で、最近はその方向には進めていなかったように思います。いつからか、“恩返し”ではなく周りのお世話になっている人ががっかりさせないこと、嫌な思いにさせないことだけを心に留めていた気がします。そのため、時には自分を卑下し、居づらくなっていたのかもしれない。

私が言葉たらずに話したことに対して、沼田先生が「恩送り」という事を教えてくださいました。その時は、とても素敵なことだなと思いましたが、今の私には未熟すぎてなにか程遠いことのように感じてしまいました。しかし後で、じっくりと思い返してみるとあるゼミ生が言っていた「自分がされて嬉しかったことを大切にしている」ということと少しつながっているような気がしました。そのゼミ生は、自分を気にかけてもらった時が嬉しいらしく、現に私はそのゼミ生から気にかけてもらったことがあり、ほっこりと嬉しくなったことがあります。その事を思い出した時に、大それたことではなく、このような小さなことからしていけばいいのだと思いました。

今回のがん哲学塾では、自分は進むべき方向がまだしっかりと持っていない事、いままで気づかない間に迷い込んでしまっていた事などに気づくことができました。

私にとってこれらは、進むべき方向を見つけるための一歩になったと思います。これからは周りに嫌な思いをさせない事、マイナスにならないようにする事に重点を置くのではなく、私も「自分がされて嬉しかったこと」を大切に少しずつ歩んでいきたいです。

次ページへつづく



【樋野興夫先生】

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、医学博士。

米国フォックスチェイスがんセンター、がん研実験病理部部長等を経て現職。2008年「がん哲学外来」を開設。高松宮妃癌研究基金学術賞受賞。著書に『いい覚悟で生きる』ほか

顧問：樋野 興夫

教頭：沼田 千賀子

副塾長：横山 郁子

塾生：青柿 和樹、大林 裕典、川口 真奈、
田中 葉月、堀部 里帆、森 夕理子、
源 麻鈴

